

# 外国の研究者として調査を行うことの効果

## ——フランスにおける子どもの芸術文化活動の参与観察から考える——

南山大学 小林純子

### 【1. 目的】

この報告の目的は、外国の教育機関における調査での研究者のポジションが、調査にどのような影響をもたらしたのかを考察することである。子どもを対象としたエスノグラフィーにおいては、「非典型的で、あまり力をもっていない大人」のステイタスを形成することの重要性が指摘されている (Corsaro & Molinari : 2017)。この報告ではフランスの子どもを観察の対象としていた日本の研究者である私が、実際には子どもの興味関心の対象として観察されていた経験にもとづき、調査の進展とともに子どもと私の関係はどのように変化したか、子どもの年齢層に応じてこの関係にどのような違いが見られたかを検討する。

### 【2. 方法】

子どもの芸術文化活動を対象に、パリの小学校と余暇センター（水曜日の午後に子どもを受け入れる市の施設）、ならびにパリ郊外の中学校において 2018 年 9 月から 2019 年 6 月までに行った参与観察の中で、フランスの子どもたちが日本の研究者である私にどのような反応を示したのかを分析の対象とする。

### 【3. 結果】

観察者としての私はフランスの子どもから、フランスの言語や学校文化を彼らのようには獲得しておらず、子どもを指導する権限のない外国人であるとみなされていた。それは Corsaro & Molinari のいう「権威のない非典型的な大人」である。この私の「外部性」ないし「異質性」は、余暇センターでは、私が大人であっても子どもたちの世界に入って彼らの経験を把握するきっかけとなったのに対し、中学校では外部の大人として中学生との距離を維持することに貢献した。この違いは、子どもの年齢のみならず、調査の進展とともに子どもと観察者との距離が小さくなった余暇センターと、調査が進展してもこの距離に変化が生じなかった中学校の環境の違い（活動の枠組みが授業か、それとも放課後などの授業外活動か、指導者が教師か、それともアニメウールか、観察者に何らかの役割が与えられたか、それとも単なる観察者のままであったか）にも由来すると考えられる。

### 【4. 結論】

「子ども社会学」が示してきたように、子どもは社会構造の単なる受動的な存在ではなく、行動する能力を備えた社会的アクターであり、それゆえ文化生産のプロセスに参加する者としての子どもの経験を理解するためには、研究者自身が子どもや周囲の大人から利用されることも重要である。フランスで子どもを対象にエスノグラフィックな調査を行う中で、研究者には時に「役に立たない大人」(Corsaro & Molinari : 2017) のポジションが与えられた。本調査を通じて、このようなポジションが積極的な意味をもつかどうかは研究者が子どもとどのような関係を形成したかによって異なり、さらにその違いは子どもの年齢や、フィールドで研究者に与えられる役割によって異なることが明らかになった。

### 【文献】

・ Corsaro W.A. & Molinari L., 2017, "Entering and observing in children's worlds : A reflection on a longitudinal ethnography of early education in Italy" in Christensen P. & James A., *Research with Children* (3rd ed.), Routledge.

### 【謝辞】

本報告は JSPS 科研費 JP17K18221 ならびに 2019 年度南山大学パツへ研究奨励金 1-A-2 の助成による研究成果の一部である。